

第3回奈良県子ども・子育て支援推進会議 概要

- 日 時：平成26年2月26日（水）15：00～17：00
- 場 所：奈良県文化会館 地下1階 多目的室
- 議 事：今後の子育て支援のあり方及び子育て支援計画の策定について
- 出席委員：別添出席者名簿のとおり
- 議事概要：

〈開会あいさつ〉

○荒井会長

- ・本会議は、本県の子ども・子育て支援の背景を模索しながら、方向性について確立するために議論をしていただく大事な会議。子ども・子育て支援というのは、様々な要素があり、とても大事な分野。
- ・県全体の子ども・子育て支援はどのようにあるべきか、何を目標値にするかということをもう少し高めていかなければいけないが、議論を積み重ねて、奈良県版子ども・子育て支援体制を作り上げていきたいと思う。

〈定足数報告〉

委員12人中10人が出席のため、過半数が出席

〈議事〉

今後の子育て支援のあり方及び子育て支援計画の策定について

○事務局からの資料説明

- ・資料1 奈良県の子どもを取り巻く状況
- ・資料2 奈良県の総合的な子育て支援計画の策定
- ・資料3 「奈良県子育て実態調査」（県民の結婚・子育てに関する意識と現状）結果の概要
- ・資料4 子ども・子育てに関する主な項目ごとの課題及び施策

○各委員等の主な意見

【荒井会長】

- ・平成27年3月の県子育て支援計画の策定を目指して、議論を重ねさせて頂く。
- ・資料4において、事務局が整理している子ども・子育てに関する課題には、とても奥深く、大きな課題がある。本日は、子ども・子育て支援というテーマでのご意見を、広くあるいは深くいただきたい。

【井上委員】

- ・結婚に向けた環境整備は、ぜひ整えていただきたい。出会いに関して対策も練られているが、あまり知られていないので、積極的に広めてほしい。

【福島委員】

- ・最近、街コンなどの婚活活動が増えていると思うが、それでも独身の方には出会いがないのか。

【荒井会長】

- ・少子化対策から見ると、晩婚を避ける対策も重要だが、女性のワーク・ライフ・バランスから見ると、晩婚でも幸せではないかという考え方があり、議論があると思う。いずれにしても、結婚してもらうためにはどうすればいいのか。

【北岡委員】

- ・少子化対策の観点から言うと、かつては、成人したら結婚して子どもを作るという雰囲気があったが、今は自分の人生は自分が楽しむものという感覚があり、人生観のようなものが変わってきた。人間というものは、次の世代にどうつないでいくかということも大事で、それを教えることや出会いのチャンスをつくることも必要。

【荒井会長】

- ・外国では、他国から養子を迎えて子育てをするということがあるが、日本の中では、養子の子育てを支援するという事はなかなか前面に出ない。本県の子育て支援計画において、養子を育てる人を支援するという事を入れるかどうか議論が必要。

【西岡こども・女性局長】

- ・子どもに対して社会的に親に代わる擁護が必要なケースがあり、養子縁組や里親の家庭で育つ、施設で育つという部分については、社会的擁護という分野で、県の子育て支援計画に盛り込む予定をしている。

【川端委員】

- ・住民票があるのに健診を受けていない児童が3万数千人という記事を新聞で見た。背景にかなりの数の児童虐待があるのではないかと考えている。
- ・今の若い世代の人たちは、子どもを産んで育て、次世代につなげていくという人間的な形成ができていない。私たち企業も、若い世代に対して、もっと人間形成的なアプローチが必要ではないか。根本的な本質的なものが子育てをしていく上で必要ではないかと思う。

【荒井会長】

- ・児童虐待が発生しないよう、子育てをのびのびできる環境はどういうものか、これは子ども・子育て支援の中核的アイテム。
- ・子育てをどのように助ければいいのか、子育てを環境から全面的に見ていく。子育て家庭の環境に合わせた支援が必要だが、家庭の様子がずいぶん変わってきている。どのように子育てをしている人の状況に合わせて支援していくか。児童虐待対策、障害児への支援、ひとり親への支援は、課題解決に向けて、深い見識と知恵を要する分野。

【原田委員】

- ・子育てのような日常的な営みに行政が関わって、第3者として支援するという事はかなり難しい。子育ての当事者である親が親として役割を果たす力をどのように育てていくか、そのような観点が必要。
- ・私は子育て支援の活動をしているが、今の0歳児を育てているお母さんたちは、とてもまじめで頑張って子どもに関わろうとしている。ところが、これまでの育ちの中で小さな子どもに関わった経験が絶対的に不足しているため、子どもにどうかかわっていいかわからず、悩んでいる。
- ・しかし、現在の親たちはいろいろな能力はもともと持っているので、当事者同士で相談し合ったり、お互い学び合うような環境ができれば、子育ても十分にやっていける。出産後早期から親自身が親として育つことを助けていくことがたいせつではないか。その中でも、専門的な支援が必要なケースには、行政や地域の人など第3者が支援するというように、対象により支援方法を変えた方がいいと思う。親同士で子育ての問題を解決できるように、行政が支援するという取り組みが、今求められていると思う。

【荒井会長】

- ・行政の支援は押しつけではなく、ニーズに合わせた支援を整えていく方がいいというご意見。子育ての環境は多様でニーズも多様化しているので、要支援の内容も多様・多岐にわたりそうだが、それにどのように対応するかの知恵が必要。子育てに行政としてどのように対応するか。

【吉田委員】

- ・同窓会で子育てを経験した女性から話を聞いた。単に子どもを預けるのではなく、就学前の保育の中での十分な教育やしつけ、また、学童保育でもしつけも踏まえて子どもを見てほしかったと。子どもが中学生になれば、行政ではなく企業の方で時短という制度を充実してもらい、男性も時短を利用してもらえればよかったと。この話は、子育て会議の課題の縮図なのかなという思いで聞いてきた。女性もキャリア志向を持った方が多いので、働き続けることができる支援を行政として行っていかなくてはならないし、子育て家庭全般の方の支援もしていかなくてはならない。

【荒井会長】

- ・奈良県は女性の就業率は全国で一番低いが、少子化は緩和されてきており、女性の就業率も世代によっては上がってきている。世代が進むにしたがって、自然と少子化あるいは主婦からの復職率は上昇傾向があるが、それをより加速させて、仕事も子育てもしやすい環境づくりが奈良の全体の目標でもあり、県の子ども・子育て支援計画の大きな目標であるということを確認させていただきたい。

【末松委員】

- ・仕事を続けていくためには、パートナーの協力、イクメンパパと言われているような男性の力がなくてはならない。パートナーを含めて家族ごとで自分たちのワーク・ライフ・バランスを長い目で考え、見通しを立てる、そのような姿が必要。また、親が様々な行政の支援をすべて利用できるように、その具体的な情報がわかりやすく手に取るようにすることが大事。
- ・私は、いわゆるファミリー・サポート・センターを利用させていただき、また、随分近所のお母さんや学童保育のお母さん同士の助け合いもあった。このような地域支援というか、人を孤独にさせない、寂しくならないようにする取組がとても大事だと思う。児童虐待対策という面でも必要。
- ・子育てに関して、お母さんやお父さんたちだけではなく、実は独身の女性も大事にしていかないといけない。世の中で子育てをするには、独身女性の力というものは必要。個人的な結婚しない理由を追求すると、子育てに関して独身女性の協力を得ることが少し難しくなると思う。みんなが足を引っ張り合わないことで、結婚している人もしていない人も、いろいろな立場の人が気持ちよく働き続けられるようにすることが一番大事だと思う。

【荒井会長】

- ・女性の生き方は、単一的な生き方から多様な生き方になってきているように思うが、その中で、働いて経済的に自立するということがとても大きな意味になってきており、看過できない。
- ・その中で、出産は女性しかできないが、子育ては女性以外もできるというように、世の中は変わってきている。女性の生き方を多様で自立的にするために、パートナーの協力というものは大きな要素であり、女性の経済的自立も含めてパートナーシップを作るという時代になってきている。

【谷口委員】

- ・奈良県の就学前児童の半数以上の方が幼稚園に通っているが、お母様方は子育て不安がある中で、とても頑張っておられる。子どもの安心・安全な遊び場所はどこにあるのかという中で、保護者も子どもを一人で遊びに行かすことができないが、親が守る

中では、なかなか子どもたちも十分に経験を積むことができない。

- ・このような状況において、幼稚園に求められてきているものも非常に多くなってきている。働く女性を応援することも大切だけれども、やはり家庭におられる方も含め、全ての子どもたち、全てのご家庭への支援をお願いしたい。
- ・市町村における子育て支援の取組に格差がある。奈良県のどこに住んでいても、同じように安心して子育てができるように、奈良県として調整役を果たしていけるよう、何か役に立たせていただきたい。
- ・幼稚園に関しては、保護者が受け取る就園奨励費助成の県内格差があるので、そのような調整をしていくことも大切ではないかと思っている。

【荒井会長】

- ・少子化対策の路線が何も決まっていない。外国では働いている女性が多い方が、子どもが増えているというような傾向もあるので、どうするかというのはとても大きな課題だが、日本の中ではまだ定着していない課題。
- ・日本は労働力が減っていく中で、女性が労働力の主要な力になるべきかどうかが、今は子育てと仕事を両立させる仕組みになっていないというのが実情。これは大きなポイントのように思う。
- ・市町村の子育て支援格差ということは現実にあると思う。子育て支援は、市町村独自の政策なので、県はこのような格差があるということは調査して公表することになっている。格差があるということを発表すると、段々とよくなっていくと思う。
- ・独自の市町村のポリシーがあるので、保育所の待機児童問題一つをとっても、それに熱心に取り組むか、遅れ気味になるかで、格差が多少出る。地域の事情があるので、全て一律の状態にする政策は、県の任務ではなく、場合によってはナショナルミニマムで国がやるかどうかになる。県は、頑張るところは応援する施策を行っている。調査はするけれど調整はしないという形だが、調査をして、やむを得ない事情があるところは応援する。

【栗木委員】

- ・保育園に子どもを預けているお母さん方は不安を抱えており、家庭において孤立させないで、家族で育てる、また、地域で育てるというような啓蒙をしくことが必要。
- ・子どもが生まれたら、「おめでとう、どうなの」というように、お母さんをみんなで支えると、その方は、「自分は一人じゃないんだ、地域の中で守られている」と感じ、「何かあった時には相談できる」という心が育ってくる。それを支えるのが、幼稚園や保育園、ファミリー・サポートなどであり、そこで専門職に就いている者、また子育てを経験した地域の人たちが、応援をしていくことが必要。
- ・結婚については、私の周りでも、なかなか結婚しない子どもさんが多い。昔は、ある程度の年齢になると、親が子どもたちに、もうそろそろ結婚を考えたらどうかという

話をしていて、これは大切なことだが、この頃はそういうことが少なくなってきている。

- ・子育ては、どこかで習って覚えるものではなく、自分が親からどのように言葉をかけてもらったかというのを思い出しながら、子どもを育てていっているのではないかと思う。その学びというか、自分たちの子どもに触れて、そういう言葉がけをすることが少なくなってきているのではないか。そのようなことができるような支援も必要。
- ・児童虐待に関して、一番心配しているのは、虐待を受けた子どもが子育てに関してい学びをしていなかった場合、何年か経って、自分たちが子どもを出産し育てていく中で、どうなっていくのだろうか、今の現状が増幅されるのではないか。それに向けても支援をしていくことがとても大事なこと。

【荒井会長】

- ・子育て不安の解消というメンタルな面がとても大事だと、何人か意見が出た。メンタル面で強くなりなさいという直接対症療法もあると思うが、不安の中身の根本治療をするには、育児体験の継承が少なくなっている中で、環境改善をして、孤立化させない環境をどう作るかというようなことが大切というご意見。
- ・虐待体験が継承されるのをどうストップするか。トラウマになる体験を何かで解消することは大きな課題。

【島田委員】

- ・男女雇用機会均等が施行されてから、女性が多くの役割を担ってきているので、一人ではやっていけないというのが正直なところ。県において、働きながら子育てできる環境整備や基盤整備をしていただいたら、精神面でとても気は楽になる。
- ・もうすぐ出産休暇という同僚やまだ子どもが1歳になっていない同僚も、残業しているのが現状。やはり早く帰りたいと思っていても帰れないのが企業の実状だと思う。
- ・資料に記載されているたくさんの環境整備・基盤整備という形で子育てを応援してくれているのだということがわかれば、それだけで力強く感じられる。

【北岡委員】

- ・吉野町では、4年ぐらい前から「子育て支援日本一」を目指して取り組んでいるが、人数が少ないので、とても上手くいっていると思う。子どもがたくさんおられる市町村では、地域毎に見ていくことが必要ではと思っている。
- ・女性が上手にキャリアアップしながら子育てすることについて、学校の先生は、転勤が県内だったり、休暇が確保されているなどの状況があるようだが、ずっと昔からキャリアを積みながら子育てができていると思う。
- ・最近では、若い女性で起業した人がいろいろ頑張っている。30年前は、女性は専業主婦がほとんどだったが、あと10年、20年と進むとほとんど男性と一緒にいると思う。女

性は子どもを産むことができるということしか、男性との違いがないと思うので、その中で、男性のほうが専業主夫になるなど、いろいろなパターンがあるということを考えてながら、10年、20年先はこんな働き方ができる、といったことを提案してもいいのではないかと。

- ・オリンピックでスケートボードを楽しそうにしている姿を見て、スケートボードをする人が大幅に増えたと聞いた。子育てに関しても、楽しそうに子育てしている姿を広めていってもよいのではないかと。

【荒井会長】

- ・北岡委員は子育て支援からアプローチしているが、結婚環境のためにも、女性のワーク・ライフ・バランス、女性の就業ということがとても大事だという観点が折々に含まれている。
- ・たとえば大阪から奈良へ家を建てて転居して来る時、女性が大阪での仕事を辞めて専業主婦になる世帯が結構いる。女性が子育て年代を過ぎて復職したい時、奈良には女性の職場がないというのが現実。
- ・奈良県でのワーク・ライフ・バランスの推進として、女性の起業支援ということで、来年度予算での試みの一つとして、女性の翻訳家を養成する。翻訳は家庭で就労できる。全国的にあまり養成されていないので、女性に限って養成する。また、研究資料の編纂事業というのも女性を中心にしてもらおう。文化度の高い女性は、そういう面で起業なり就労ができるのではないかと、相当先になるかもしれないが考えている。
- ・子育て支援の目標を女性のワーク・ライフ・バランスから捉えるか、少子化対策から捉えるかという面はもう少し先で解決するにしても、本日は、子育て支援を充実すると、非婚・晩婚化、晩産化に歯止めがかかるのではという意見もあったので、やるべき分野として、子育て支援を充実することは大事。
- ・私の考えでは、具体的に子育て支援の実が上がる必要があるのだが、計画に書いてあることを全てやっています、と総花的になっていてもなかなか実が上がらないのではという危惧を抱いている。
- ・例えば保育でもいいし、子育ての孤立化を無くすというテーマでもいいが、これだけは相当抜き出した施策にしたい、相手を絞ってこれは頑張るということを実施して、それが達成できたら、次はこれをやると。県はいつも総花的に施策を出していくが、このアイデアについては徹底してやるというような直進的な施策にしないといけないと思っている。方向として相当進んで、奈良はこんなことまでしているのだということができればいいと願っている。
- ・女性が就職、再就職できるということは、とても大きな課題なので、女性のワーク・ライフ・バランスの中でも捉えていきたいと思うが、子育て支援については、これだけは実施するという絞って、実行策を練るということができればと思っている。